今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

心から信じてくれたから 私も生徒も大きく育った

新潟県立十日町高校　定時制課程　教頭　清水 哲（さとる）

人はどれほど成長するのか、その可能性は無限だ。だが、いつ、どんな速さで成長を遂げるのかは、人それぞれである。信じる力の存在が人を大きく育てることを自らの体験を通して学んだ清水先生が、恩師からの学びとこれからの決意を語る。

「あなたが大将なのだ」

新潟県立新潟南高校に赴任して5年目、38歳になる年に、進路指導主事を務めることになりました。私よりももっとふさわしい方がいましたから、最初はお断りしていましたが、「校長は私を信じて声を掛けてくださったのだから頑張ってみよう」と考え直し、お受けすることにしたのです。

最初の数か月は本当に無我夢中でした。一つひとつの行事、活動について精査し、3年間の進路指導を体系化していくことは簡単なことではありません。さらに、ベテランの先生方にはそれぞれの豊かな経験を基にしたお考えがあります。進路指導の責任者として表面上は毅然とした態度で振る舞いながらも、内心はとてもぐらついていたというのが正直なところです。

そんな私に「あなたが大将なのだから、遠慮せずに精いっぱいやりなさい」と日常的に声を掛け続けてくださったのが、その年に教頭として赴任された麩沢（ふざわ）祐一先生です。最初のうちは自分を鼓舞しながら必死で突っ走っていた私も、何か月か経つとふと我に返り、「自分の方針は間違っているのではないか」と不安になってしまうことがありました。麩沢先生から「どうですか？」と問われ、「自信がありません」と率直に答えたこともあります。そうしたやりとりの中で、「あなたが大将なのだから」と麩沢先生は何度も背中を押してくださいました。

ベテランの先生方と意見が一致せず、空気が重くなった時、麩沢先生は雰囲気を和らげようとアイスキャンディーを差し入れるなどしてくださったものです。進路指導主事としてやっていけそうだと自分なりの見通しが立ったのは、4年目を迎えるころでしたから、麩沢先生の存在がなければ、私は途中で音を上げていたかもしれません。

生徒を信じ、同僚を信じる

今思い返すと、麩沢先生は全ての教師に対して、「きっと出来る」と信じて接してくださっていました。私たちが思わぬ失敗をしてしまった時も、自らが矢面に立って「申し訳ありません」と頭を下げる姿を見て、とても心強く感じたものです。

もちろん、その姿勢は生徒に対しては一層明確でした。当時、新潟南高校の進路指導のテーマは、東京大などの難関大に合格するための指導を充実させることでした。ただ、生徒以上に教師の側に「本校でも難関大に合格できる」という自信が不足していたように思います。

そんな中、麩沢先生は「私には東大合格は無理ですが、生徒なら出来るかもしれないじゃないですか！」と冗談のように、しかし本気で言い続けていました。実際、難関大や医学科の合

先輩教師の言葉

「任せる」ことは相手を心から信じ、責任をとること

新潟県立新津（にいつ）高校　校長
麩沢（ふざわ）祐一

赴任直後、当時の校長から「新潟南高校の今後を担う人材として、清水先生を進路指導主事に抜擢（ばってき）したのでフォローしてほしい」と言われました。とはいえ、一生懸命やっている清水先生にさらに「もっと頑張れ」などとは言えません。だからただ、顔を合わせる度に「どうだ？」と声を掛け続けました。

清水先生の考えに共感する人もたくさんいましたが、それでも全員がすぐに一致するわけはありません。それは、どんなベテランの先生であっても同じことです。私だって、清水先生の立場で清水先生と同じ考えを持ったかと言えば、必ずしもそうではなかったでしょう。それでも、清水

格者が出始めると、「自分たちが育てた生徒も難関大に合格できる」ことがイメージ出来るようになり、生徒への声掛けも変わっていきました。開校以来、初めての東京大合格者を出した時は、麸沢先生との約束が果たせたようで感無量でした。

進路指導主事を務めるまでは、私は「この生徒は私が合格させた」と考えてしまうこともあったように思います。しかしいつのまにか、「生徒の心に火をつけることが出来た」と思うようになりました。合格をつかんだのはあくまで生徒の力なのです。今、私は「全ての生徒に、それぞれの可能性がある」と心から思っていますが、それは麸沢先生のさまざまな言葉が私に根付いた結果なのでしょう。

当時の麸沢先生と同じ役職になった今、それぞれの先生が目の前の仕事に集中できるようにすること、そして生徒の可能性を教師全員で信じる学校をつくることが私の役割になりました。生徒は教師の本心を必ず見抜きますから、言葉だけではなく、心の底から生徒を信じなければなりません。特に、若手の先生方が生徒の可能性に驚くような経験を積めるよう、場づくりをしていきたいと思います。

そして、麸沢先生が私にそうしてくださったように、私も先生方の可能性を信じて日々接していきます。一生懸命やっても失敗すること、成果が表れないことはあります。それでも、萎縮せずに仕事が出来る職場をつくることは、一人ひとりの先生方の生徒への接し方に良い影響を与えると私は信じています。

左 ふざわ・ゆういち　理科。新潟県立村松高校、新潟高校などを経て、佐渡高校、新潟南高校で教頭、川西高校で校長を務める。2013年度より現職。

右 しみず・さとる　地理歴史科。新潟県立六日町高校、新潟南高校、長岡高校などを経て、2013年度より現職。

撮影◎新潟南高校にて

先生を信用し、その結果に対しての責任を取るのが自分の仕事なのだと考えました。

清水先生の考えをベテランの先生方に伝え、そして先生方の声を清水先生に伝えることもありました。清水先生が自分の信じた通りに、存分に改革に取り組める環境は整えてあげたかったのです。それが「任せる」ということではないでしょうか。

先生方は一人ひとりそれぞれ素晴らしい考えを持っています。それらを理解し、自分と異なる意見のベテランに「これでいきましょう」と言えるようになるには、時間と経験が必要です。しかし、言葉に詰まった若手に「反論できないじゃないか」などとベテランが言うような環境では人は育ちません。人を育てるのには時間が掛かるのです。

生徒の成長も同じではないでしょうか。私たちは生徒のやる気のスイッチを入れようといろいろと働き掛けますが、どれが生徒を変えるきっかけになるかはやってみないと分かりません。だからこそ、一つひとつの指導に手を抜かず、「必ず出来るようになる」と信じて、根気強く生徒を見守ることが大切なのです。